

# IV Report

このページは、INNERVISION誌2006年12月号掲載記事を、株式会社インナービジョンの御厚意により転載させていただきました。

## パーフュージョン画像の標準化をめざし ASIST-Japanが第1回公開セミナーを開催 **WebUP**

11月4日(土)、東京・大手町の経団連会館国際会議場において、ASIST-Japanの第1回公開セミナーが開催された。テーマは「急性期脳梗塞におけるCT/MR灌流画像の標準化の意義—PMA(perfusion mismatch analyzer)の開発」。主催したASIST-Japanとは、Acute Stroke Imaging Standardization Group-Japanの略称。厚生労働省平成17年度循環器病研究委託費の公募研究課題(17公3)の研究グループで、岩手医科大学放射線科の佐々木真理氏が主任研究者となっている。グループは、放射線科医、脳神経外科医、神経内科医などで構成され、多施設にわたり研究を進めている。その目的は、急性期脳梗塞での頭部CT、MRI検査の標準化を図ることであるとしている。また、研究の関連プロジェクトとしては、日本磁気共鳴医学会の研究プロジェクト2「脳梗塞におけるMRI検査の標準化に関する研究」、日本放射線科専門医会・医会の「CT/MRI灌流画像の標準化に関するワーキンググループ」がある。

急性期脳梗塞の診断、治療方針の決定には、CT、MRI検査が行われるが、装置や施設によって手技や判定法が異なってしまう。このことは質の高い医療を行う上での問題とされている。特に近年、t-PAの血栓溶解治療が広まりつつある中で、適用を判断する際に生じる施設間格差を解消することは、重大



セミナー会場

合併症の防止、予後の向上などの観点から求められている。そのためにも、CT、MRI検査の標準化を進め、検査の質を向上させていくことは重要だと言える。

セミナーでは、まず岩手医科大学脳神経外科の小川 彰氏が開会の挨拶を行った。これに続き、来賓の東北大学大学院医学系研究科高次機能障害学の森 悦朗氏が壇上に立ち、「パーフュージョン画像の標準化は難しいが、製薬、モダリテイメーカーの関心も今後ますます高くなる。研究を進め、海外にもソフトウェアを提供して、世界中にインパクトを与えてほしい」と期待を込めて挨拶した。

講演1では、中村記念病院脳神経外科の中川原譲二氏が座長となり、慶応義塾大学放射線診断科の百島祐貴氏がASIST-Japanの活動とパーフュージョン画像の解析ソフトウェアであるPMAの提供について発表した。百島氏は、ASIST-Japanは個別に研究課題を設け、これまで合計10回に及ぶ研究課題別委員会を開催してきたと説明。また、標準化手法の提案内容、「CT/MR灌流画像実践ガイドライン」の進捗状況について述べた。さらに、PMAについて、解析手法の標準化への布石となるものとして公開するとし、その方法や使用条件についても紹介した。

続く、講演2、3では、PMAを開発した北海道大学放射線医学分野の工藤興亮氏が発表を行った。講演2は、初台リハビリテーション病院脳卒中診療科の酒向正春氏を座長に、「CT/MR灌流画像の問題点と標準化の意義」と題し、パーフュージョン解析の原理や解析アルゴリズム、aLUTなどの標準化について取り上げた。また、講演3では、国立病院機構九州医療センター脳血管内科の岡田靖氏を座長に、PMAの概要と操作方法について説明した。PMAは、Windows



小川 彰氏  
(岩手医科大学)



森 悦朗氏  
(東北大学)



佐々木真理氏  
(岩手医科大学)



中川原譲二氏  
(中村記念病院)



酒向正春氏  
(初台リハビリテーション病院)



岡田 靖氏  
(九州医療センター)



百島祐貴氏  
(慶応義塾大学)



工藤興亮氏  
(北海道大学)

XPで動作し、LUT、AutoWindow、VPE、対側比という標準化項目を実装している。工藤氏は、PMAの解析方法について、現時点で最も妥当なものを使用しているとも述べた。

セミナーの最後には、佐々木氏がASIST-Japanの今後の活動などを含めて閉会の挨拶を行い、セミナーを締めくくった。

### 問い合わせ先

ASIST-Japan  
<http://plaza.umin.ac.jp/~asist/topPage.htm>